

# フィンランド・ネウボラにみる子どもと家族を支えるしくみの検討

## — 支援のしくみと利用者の意識の特徴 —

A study of how the supporting families with children in Finland

吉川 はる奈\*  
Haruna YOSHIKAWA

尾崎 啓子\*\*  
Keiko OZAKI

**【概要】**筆者ら(2015)はフィンランド・ネウボラを事例分析し、サポートの特徴から、継続した丁寧なサポートがリスク予防につながることを指摘した。本研究では先の結果を明確化するために、環境の異なる対象地域として、ヘルシンキ都市部のネウボラ1事例をとりあげた。市の担当者とネウボラの保健師にインタビューを行い、特徴を整理した。その結果、都市部特有の問題を抱えつつも、ネウボラナースが母親と1対1で対話することを大事にしながら、継続してサポートすることで子どもと家族のリスク予防の機能を果たしていることが示された。さらにネウボラ利用者に聞き取り調査をし、利用者の立場からみたネウボラの特徴を整理した。

日本の子育て支援をめぐる状況においては、現時点において、地域の保健センターでの乳幼児健診にあたる保健師や子育て相談にあたる臨床心理士に関して、相談の際にはできるだけ同じ担当者があたるように配慮している。つまり相談の継続性のための努力、工夫はすすめられている。とはいえ、妊娠期から継続して、ネウボラでの相談体制が構築されているフィンランドの継続支援の徹底は、やはり優れた学ぶべき特徴といえる。

状況が異なる中で、日本の支援の特徴として、多様化された支援の形が実施されていることがあげられる。特に母親の特徴や状態、抱える問題状況によっては1対1で支援するよりも、グループでの支援や母親同士のいわば自助グループ的な活動も実施されることで、効果をあげている事例がみられる。これらをふまえると、現時点で日本の支援内容には継続性という部分では十分対応できない部分がある一方で、1対1で支援するだけでなく、グループでの支援を含めた多様な支援を特徴としてっており、多様性や柔軟性を日本の支援の特徴として活かしながらさらに継続性を強化していくことが求められる。

**【キーワード】**ネウボラ、利用者、支援の継続性、安心感、支援の柔軟性

### はじめに

孤立した子育て、リスク家庭のリスクの連鎖、子育て中の母親が抱く負担感など、子育てをめぐる問題や課題が指摘されている。少子化の進行も深刻でそれらを改善しようとする動きは年々高まっているが追いつかないという状況である。中でも「子育てを社会が担う」ことが求められているが、実際に求められるサポートを求める者へ求められる時に届けることができているのかという点において課題は多い。

昨今では、子育てしやすい国といわれるフィンランドの子育て支援モデルの象徴として紹介されるネウボラについて、日本国内でも関心が集まっている。その中で、子育て中の家族を地域レベルでできるだけ継続してサポートできるようにと、厚生労働省は平成26年度に妊娠・出産包括支援モデル事業を実施した。いわゆる日本型ネウボラのモデル事業が始まっている。ネウボラとはフィンランドが行う子育て家庭への相談の場である。

筆者らはすでに、フィンランド、ヘルシンキ郊外地域にあるネウボラを取り上げ、子どもの育ちを支える継続的支援のしくみの特徴について考察した。また就学前教育との関わりについて、エシコウルを含め論じた(2015)。エシコウルは就学前の6歳児を対象にしたプレスクールで、義務教育ではないものの9割以上の子どもが通う、いわば小学校教育への橋渡しとなる場である。少人数のグループで遊びの中で楽しみながら数や文字に触れる内容となっている。

家族の健康を支える専門機関であるネウボラは、地域の子どもの発達や教育に関連する他の専門機関、教育機関であるエシコウルや保育園、小学校などとのサポートチームによる実質的な連携を行っており、長期継続支援の中核となっていた。その中で、継続し長期にわたりていねいに家族と子どもをサポートしていくことが、子どもと家族のリスク予防につながることを指摘した。

そこで本論では、これらの結果をさらに明確化するこ

\* 生活創造講座

\*\* 教育実践総合センター

とをめざし、フィンランド国内の他の地域、つまり前対象地域の「郊外」とは環境が異なる、ヘルシンキ「都市部」のネウボラを対象としてとりあげ、考察をすすめる。具体的には異なる地域のネウボラがもつ特徴とサポート内容を明らかにする。さらにネウボラを実際に利用した母親に聞き取り調査を行い、ネウボラがもつどのような特徴、サポートの特徴が、母親の積極的利用につながっているのか、それらが子育てによる喜びや安心感につながるかについて明らかにする。これらを検討することを通して、日本の子育てサポートへの応用の仕方について探る。

## 2 ネウボラの実際

ネウボラとは、フィンランドの子育て中の子どもと家族を対象にした相談の場である。具体的には誕生前から子どもが就学までの間、子どもの健康や発達のチェックとともに子どもを妊娠、出産し、育てる母親の健康を診る、いわば家族の健康を支える相談の場である。フィンランド語でneuvola と記載し、neuvo は情報、アドバイス、la は場所という意味で、相談室、相談できる場所である。ネウボラでは、医師、看護師、保健師、ソーシャルワーカー、心理士が対応するが、女性スタッフがほとんどである。日本の地域保健センターに医療と相談機能をさらに充実させたような施設である。

もともとはロシアから独立したフィンランドが、周産期の子どもの死亡率を減らしたいとして、妊娠中からの妊産婦の継続的経過観察を充実させることをめざし、医療と福祉双方を充実させようと小児科医、Aユルッポ教授を中心に作ったしくみである。このしくみによってリスクケースとして疑われる場合には、早期介入、早期対応でき、実際に周産期の死亡率は減少した。また、どんなに継続したこまやかなサポートが用意されていても、妊産婦が利用しなければ、サポートできないので、妊娠初期に、妊婦が確実に来所するように初回の来所の動機づけを工夫し、ほぼすべての妊産婦が利用する相談の場となっている。

具体的には妊娠すると妊婦は育児手当として、育児パッケージ（図2）の贈呈あるいは140ユーロのお祝い金の贈呈を受けることができるということである。これらはネウボラか医療機関で妊婦健診を受けることが条件であり、妊産婦がネウボラに通い健診を受ける動機付けになっている。多くの女性が、妊娠の兆候があったときに、病院ではなく、まずネウボラを訪れるという。ネウボラはその自治体にもあり、近隣のネウボラに行くことができ、無料で健診をうけられる。出産する際は病院に入院するが、妊娠期間中と出産後の育児中には、母そして子の健診はすべてこのネウボラで行い、家族をサポートする場としている。

## 3 目的

先の研究(2015)では、ヘルシンキ郊外地域のネウボラ1事例をとりあげ、その特徴を整理し考察した。地域によって子育てをとりまく状況は異なると予想されるが、都市部では異なる様相をみせるのか。地域によって、ネウボラに求められる特徴はどのように異なるのか。本研究では、都市部地域として、ヘルシンキ都市部のネウボラを対象とする。

また子育ての時期それぞれのニーズにあったサポートが求められることが予想されるが、実際に子育てをしている母親は何を求めて、ネウボラを利用するか、ネウボラ利用者の意識をたずね、フィンランドで子育て支援の場として子育て中の家族に支持される理由は何かについて整理する。それにより日本国内の子育て支援に活かす手がかりを探ることを目的とする。

## 4 結果

### 1) 対象地区の特徴:人口増加中の地域

対象地区として、ヘルシンキ都市部のマルミ地区のマルミネウボラをとりあげた。その特徴について市の担当者と保健師にインタビューを行い、特徴を整理した（図1）。



図1 建物の玄関の様子

マルミ地区の人口は3万人弱。ネウボラに登録されているのは2015年2月現在で3002人。妊婦が117名登録されている。ヘルシンキ全体の人口が6万人弱であり、人口が増加中の地域である。1年で約1000人程度増えているところである。ヘルシンキ市内でネウボラは24か所あるが、保健所と歯医者などが併設されている多機能型のネウボラが多い。

### 2) 市民の育児パッケージへの関心の高さ

担当者によれば、毎年、地元紙にその年の育児パッケージを写真発表（図2）するという。街全体で育児パッケージへの関心が高い。育児パッケージとは、出産後の家族が当面の育児に必要な物をそろえた育児品(470ユーロ相当、2015年3月調査時)である。特にそれらを詰めた箱（新生児用のベビーベットに活用できるほどの大きさ）のデザ

インには関心が高く、毎年新しいものを発表し、きょうだいが、同じパッケージデザインにならないようにと工夫しているという。を見せていただいたものはその年の新しいもので、写真を入れると家族の歴史を見ることができるデザインである。



図2 地元紙での育児パッケージの紹介

箱は、マットを下に敷き、ベビーベッドとして使える大きさで(図3)、箱ごと車で移動させることもでき、便利だと好評であるとのことである。その他、寒い地域ならではの、ベビー用ダウンは寒い日でも、散歩に出かけることができるので、フィンランドの寒い冬には必需品という。外で昼寝させるのによいと評判である。140ユーロの現金(2015年3月調査時)よりも、育児パッケージを選ぶ人が圧倒的である。



図3 中身を出すと箱がベッドとなる

現金の方が好まれるのではないかという予想を覆し、現在に至るまで、毎年、ほとんどの夫婦が育児パッケージを選ぶという。すぐに役に立つグッズが入っていることに加え、箱のデザインが毎年リニューアルされるのでその箱で子どもの誕生の年がわかるので記念の品になるという。グッズが収納された箱はベッドとして使用した、子どもの成長後、記念として残し、収納箱として使用する家族が多いという。われわれがみたものは、木が枝を拡げ葉がついた2014年のタイプで、家族の写真を飾りながら使えるとの説明だった。支給元はフィンランドの社会保険庁、KELAである。現在は、育児パッケージは

法制化して、母親手当となり、所得制限は撤廃されている。つまりすべての親子に支給される手当である。



図4 育児パッケージ2014年版

### 3) 併設型施設による効果

ネウボラには、単独の建物として設置されている施設もあるが、保育園と併設、保健センターや歯科と併設など、いわば併設型が多く、1つの建物が多機能化されている。またコスト削減のために有効であるという。また利用者は、一方に通う際にもう一方に足を延ばせるので負担感が減るという。さらにいえば、併設型の施設であることにより、足を運ぶ機会は多くなり、また行きやすいというイメージが生まれる。

すべての妊婦が妊婦健診をうけ、出産や胎児の成熟や出産のリスク等を減らすことをめざす目的で始まったと言われるが、現在、ほとんどの妊婦が妊婦健診をネウボラにて定期的を受診するようになるという。妊婦健診の受診率をあげ、リスクの早期発見と早期の対応につなげるために始めたということだが、誕生後の乳児の死亡率が低下した効果もあったと言われる。また妊娠初期から継続してネウボラに通うことで、子育て家族には近所の頼れる場所としてネウボラが積極的に利用され、子育て家庭の頼れる場として機能している。乳児死亡率や周産期死亡率を改善しようと母子保健と小児医療、育児相談等をワンストップにし、もれることがないようにサポートする体制を作ろうとしたという優れたサービスで1937年には制度化された。



図5 ネウボラ内の診察室の様子

#### 4) 妊婦ネウボラと子どもネウボラの設置

ネウボラでは子どもへのケアと母親へのケアがあり、それぞれが設置されている。実際には、母親や子どものケアだけでなく、家族をケアするようにしている。子どもを育てる家族をサポートすることを大事にしているという。子どもの誕生に当たっては、子どもを育てる家族の状況を妊娠4か月頃にはかなりていねいに把握しておく。子育て環境としての状況を把握するのである。またネウボラは予約制であり、待たずにゆったり相談を受けることができる。しかし週に1度、予約なしの日を設けているという。予約ができない人、急に相談が必要になった人にむけて、予約なしの日、だれに対してもオープンの日としている。予約はネットで行うことができる（図6、図7）



図6 子どもが笑顔になる雰囲気をもつ診察室内



図7 子どもの心理相談コーナー

また電話相談はかなり多い。曜日を決めて週に2回行うという。子どものネウボラは、子どもの健康格差をなくすことを目標にしている。2種類のネウボラがあることから、母も子も含め、家族を丁寧にサポートできるようになっている。

#### 5) 就学前までに支援の必要性を判断

「ハイリスク児の発見は就学前までに行う」ということが目指すこととして掲げられている。つまり就学前までに支援の必要性を判断できるようにする。そのために多職種（保健師の他、医者、言語ST、作業PT、保育士等）

間で子どもと家族の状態判断をし、指導計画をたてる。時期として、介入の時期だと判断し、その際に躊躇する家族に対しては、サービスを受けるのが、権利だと伝えられている。出生率も高い(図8、図9)。

親は子どもが3歳まで育休をとることが可能である。家族はこの間は子育てに集中して楽しむことができる。その場所の提供としてもネウボラが役割を果たすとしている。



図8 会議室内でスタッフと。どの部屋内も明るい



図9 当日相談に訪れていた家族

とにかく幼児期は子どもが楽しんで遊べるように育ててほしいという。勉強は学校へ入ってからでもよい。



図10 明るい建物内廊下

フィンランドも財源の問題はあるが、ネウボラのリスク予防としての効果が支出削減の役割を果たすとしてす

すめられている(図10)。

また偏りがないように子どもの出生状況でネウボラナースの地区配置人数決める。ヘルシンキで南部は人口増加が多い地区である。人口集中もする。人口が多く集中することだけでなく、家族の状況も多様であり、離婚、薬物、DVなど問題を抱える家族も多くみられ、初期の家族状況の把握には注意を要する家庭が多い。早期に子育てをサポートし相談を開始、継続していくことが求められる。

## 6) ネウボラ利用者の意識からみるネウボラでの支援の特徴

事例：バンター市ネウボラ利用者Gさん

利用者Gさんは日本人で、フィンランドで出産、現在もフィンランドで子育てを行っている。ネウボラをどのように利用していたか、利用していた理由は何か、つまり何を求めてネウボラを利用しているのかについて、話をうかがった。以下の①～⑥の特徴が見いだされた。

### ①いつでもすぐに直接、自分が話せる安心感がある

自分の親が近くに住んでおらず遠くに暮らす場合、すぐに頼れる場所としてある安心感があった。困ったときに直接、担当者にいつでも電話できる安心感がある。私の場合、直接話せることがとても重要だった。直接電話して、悩みを直接話し、聞いてもらい、ときには教えてもらい、ずいぶん助けられた。そこで受けたアドバイスは適切でとても役にたった。第1子、第2子どちらの子育て中もずっとお世話になった。

### ②心配してくれる人がいる実感がある

「ネウボラ」に繋がっているというより、特定の「ネウボラナース」につながっている感じであった。自分のことを心配してくれる人がいる実感があった。

最も子育て中で不安だったのは第1子のときの子育ての不安、悩みだった。日常的なことで上の子どもの悩みがずっとずっと大変だったことを覚えている。具体的には、なかなか寝ないとか、離乳食を食べてくれないとか。日常的なことで毎日のことでとてもつらかった。思い余ってそんなときに電話したら、まず、「あなたはごはんちゃんと食べてる？自分のケアをしてる？」と私自身のことをたずねられた。子どもではなく、「(母親である)私の状態を確認」し、私自身の「ケアが必要」とまず心配してくれた。その瞬間、緊張がとけた感じだった。電話をかけてよかったと思ったし、それから不安なとき、迷った時にはすぐ電話をかけるようになった。

### ③母である私をみんなが心配してくれる

開放保育園もよく利用して、その園長が私の顔をみるたびに声をかけてくれ、世話をしてくれた。近くの保育園の開放日を利用して親子でよく通った。子どもだけでなく、私も園長に声をかけてもらい、みんなが心配してくれてうれしかった。

### ④サポート先が広がった

ちょうど子育てで一番大変な時期に夫は仕事が忙しくなり会社にいる時間が長くなった。私自身の将来のキャリアアップへのあせりもあり、どうにもならず私はネウボラに相談した。巡回カウンセラーもよく利用していた。夫に全く頼らなかったわけではなく、夫にも頼るが、日常的なことで頼るサポート相手ではないと思った。

### ⑤日常的な相談で頼りになる人がいる

日本のようにママ友といわれる友達はイメージできない。ママ友同士のサポートではなく、ネウボラナースにサポートしてもらいイメージ、頼りになる人がいる実感である。子育ての日常的なことで悩みに対して、ネウボラナースのアドバイスは適切だった。子どもが食べないことに関しては母親である自分がモリモリ食べる姿をモデルで見せるとよいというアドバイスだった。食べない子どもをみて、とても悩んだが、自分がおいしそうに食べることの方が重要だとわかり、安心した。

### ⑥子育てを楽しむことに集中できる

今だから思えることかもしれないが、子どもとたくさん話せたと思う。子育てを集中して楽しむ時間ができたし、信頼関係は長く向き合ったからこそ今の関係のようにできたと思う。周りからの余分な期待はなく、子どもの成長を素直にみることができた。日本でよりも暢気にできたかなと思う。ただ、仕事はいつ復帰なの？とよく聞かれた。フィンランドは仕事をするのが当たり前だから。でもしっかり守られていて、集中して子育てを楽しめる時間のように思う。

## 5 考察

### 1) 日本の子育てをめぐる状況

晩婚化、晩産化の状況の中で、子育ては孤立し、母親が子育ての不安、ストレスにさらされていることが指摘されている。社会で子どもを育てるという意識は理念としては少しずつ浸透しているとはいえ、実際の子育てする母親にとって、求めたい支援をたずねると、必要なときに必要な支援がほしい、必要なタイミングで気軽にお願いできる敷居が高くないサポートがほしいという。気軽にお願いできる、敷居が高くない場所は、居住地域、近所にあるということは必要条件であろう。現在、全国で地域に子育て広場や子育てサロンが増えており、近隣の子育て支援の場がそのような機能を果たして、母親たちの居場所になっていることは事実である。とはいえ、子育て広場内での母親たちの仲間関係のむずかしさもより利用者が限られ、必要な人が利用しないなど課題も多いとされる。

では、敷居が高くないサポートに求めるものは具体的には何か。小さな日常的な子育ての悩みや不安、つづきをタイミングよく聞いてもらい、受け止めてもらい、

安心できる場所ではないか。その際に対話ができる安心できる存在が重要になるのは言うまでもない。

## 2) 安心できる相手がサポートするしくみ

子ども・子育て支援制度では家庭的支援の充実、支援の多様化など、じっくり伴走して母を支援することが求められている。支援には人的、物的、情動的サポート、心理的サポートなどさまざまな形があるが、妊娠、出産、子育てにおける母親と家族のエモーショナルなサポートは重要である。支援というと、物的サポートや情動的サポートの方が、目に見える支援であり重要度の高い支援として理解されやすい。一方、エモーショナルなサポートを果たす存在もあげられる。たとえばドゥーラ、すなわちお産に付き添ってくれる人の存在が着目されるようになった。もともとはブラジルで、医師や助産師が少なく手術等もあり、お産に付き添う専門職が確保できないので、お産に付き添ってくれる人を探したところから始まったといわれる。具体的には1人の女性、出産経験者がしっかりお産に付き添ってくれるしくみである。妊娠、出産、育児期を通して継続的に母親を心身両面からサポートする「ドゥーラ的存在」、「仮親的存在」とされ安心できる相手として頼りにされている。日本にはドゥーラは少ないが、それに近い形の立場で母親に付き添う大人の存在は求められている。特に都市部で出産をした場合、近隣に頼る場所がない、頼りたい相手が高齢で頼れない、頼れるまでの知り合いがないなどという事態も多いといい、このような経験者、安心できる頼りになる大人の存在が欠かせない。

## 3) 家族の支援を支えるフィンランドの理念

今回は支援のしくみの特徴だけでなく、利用者の意識を整理することで、ネウボラの利用は子育てでどのような役割を期待されているのかについて検討し、以下のよう示唆がえられた。

第1に、安心感で支えられる：1対1の対話ができること、そのような場所は貴重である。また直接つながること。目の前の状態が不安なとき、明日の状況が不安なときに、しっかり自分が支えられることは安心感につながるという。

第2に、子育てを楽しめる：支えられる安心感だけでなく、休暇をフルに使って子育てに集中でき、親役割を楽しめること、子育ての時期に、子育てに集中できること、子どもが子どもでいる時間を保障できることが可能になる。安心できる存在がそばで、声をかけてくれることでうまれる余裕で楽しめる。

そして第3に、頼りになる身近な人がいる：つまり安心できる存在。気兼ねなくサポートを受けられる存在の重要性。具体的には同じことを経験していたり、専門家としてわかっていたり、こちらの状況を語らずとも理解でき、気持ちがしっかり伝わること、理解してもらえ

支援者がいることで、多くの妊産婦が不安に陥るリスクを予防できることが期待できる。

フィンランドの社会政策の中で子どもの福祉を向上させる11項目のうち、安心で安全な大人がそばにいる、両親自身の幸福、から育てる大人の幸福が子どもに安心、安全をもたらすことであり、家族を支援することで子どもの育ちを保障していくという子育てに対する考え方が明確に示されている。

このように、ネウボラがどのような役割を期待されて利用されているかにとどまらず、子育てに対してフィンランドがめざす考え方、理念、についての違いもうかがわれた。

## おわりに

日本では、子育てで孤立しがちな母親に対して、ていねいできめ細やかな支援をめざしているが、一方、フィンランドでは、子育て中の母親への支援というより子育てする家族をサポートするという考え方が強調されていた。家族への支援を行い、家族の子育て力をパワーアップさせ、家族の問題解決への対応能力を高めることを目指している。日本は母親の孤立を防ぐため、母親同士の結びつきをめざした、母親の仲間関係をていねいにつくっていくことをめざしているところに特徴の違いがみられた。日本としての支援の特性を今一度、整理し、必要な支援のあり方について今後も考えていきたい。

研究調査にご協力くださった皆様に感謝申し上げます。なお本研究は平成26～28年度科学研究費基盤研究(C) (課題番号26350037)の助成を受けている

## 【引用・参考文献】

- ・百瀬宏、石野裕子編『フィンランドを知るための44章』明石書店、2008
- ・庄司良信、中嶋博編『フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店、2005
- ・妊娠・出産包括支援モデル事業の取り組み事例集 厚生労働省、2014
- ・仲本美央、山本房代他、フィンランドの子どもを取り巻く社会環境、淑徳大学研究紀要、45,285-302,2011
- ・吉川はる奈、尾崎啓子他、フィンランドにおける子どもの育ちを支える教育事情—ネウボラとエシコウルにみる就学前期を継続的に支えるしくみ—、埼玉大学紀要(教育学部)、2015